学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区目白1丁目5番1号
黎明会館316号室
電話03(3986)0221内線2607
http://gakushuin-press.org
発行・編集人　加藤絵梨香
年間500円

第41回大学祭行われる

進化する祭

10月29日から31日にかけて、第41回大学祭が開催された。晴れ間を見ることができない日が続いたが、来訪者数は4万5千人に上った。これは、昨年の記録を大きく上回る数字であり、連日の大盛況ぶりが感じられる。今年の祭りも伝統を受け継ぎながら、昨年とは異なる新しい一面を見せてくれた。

（左上）美しい生け花の数々　（右上）来訪者を迎えるため彩られた西門
（左下）陽気な羽田気が漂うキャンパス　（右下）笑顔で接客する学生達

秋の一大イベントと参加する団体は、この日に向けて多種多様な催し物を準備してきた。そして待ちに待った大学祭が始まり、普段は落ち着いた雰囲気の本学が熱気に包まれた。今年のテーマは、現在流行っている「祭ろう！」に決定。これには、この瞬間を存分に楽しんでほしいという大学祭実行委員会（以下、実委）の思いが込められている。

本年から新企画として、実委は1万個のペットボトルキャップを使ったエコフェ飾と、西門付近にてイルミネーションを実施した。その他に、新しい出店の配置、ピラミッド広場へのステージ・アトラクションの場所変えにも力を入れる。実委の委員長である内藤義さん（済3）は「挑戦を恐れずに、積極的なスローガンに掲げて頑張りました」と笑顔で語る。

大学祭初日は曇り空の中、「客を呼び込む花吊りがキャンパスの至る所から聞こえ、学内は活気づく。盛調なスタートを切ったが、2日目は雨及び強風に見舞われた。正午には台風警報が出されたため、残念ながら出店は15時までに完全撤退することに。ステージ・アトラクション企画も、應援團を除いて中止になってしまった。その一方で、鈴木おさむのトークショー、小泉進次郎の講演会など、室内企画は無事に進行することができた。雨の中でも本学に関心の高さがうかがえる。最終日は出店の終了が危ぶまれたが、全ての計画が滞りなく決行された。休日ということもあり、この期間中で一番の賑わいを見せる。やがて夕暮れが暗くなり始めた頃、後夜祭が中でも逞しく出店を営業し、展示を開いてくれた皆さんには、とても感謝しています。また、足元の悪い中、ご来場して下さったお客様方には大きな感謝を覚えました」と述べた。

スタッフ・団体ともに過酷な状況での活動を余儀なくされました。しかし、そのわった学生達の表情は、苦労が報われて達成感に満ちあふれていた。

（2、3面に特集記事）

海外をより身近に

留学フェア


本田さんを囲んで談笑する参加者

10月20、21日に中央教育研究棟で「留学フェア2010」が開催された。これは国際交流センター主催によるイベントで、留学したい人・する人・した人が自由に交流できる。昼休みから4時頃の間に実施され、以前までは、この催し物に「留学クラブ」という名称が付いていた。今回はその内容をさらに充実させ、拡大版となっている。

国際交流センター米国に留学した本田舞和子さん（政3）が、留学の魅力を多くの学生に伝えたいと企画したのだ。

個別相談ブースには、各国の留学体験者とその国から来日した留学生がおり、あらゆる情報を語った。

フェア協力者の本田さん曰く、「異文化を知ることで視野を広げたい人、様々な人種が共存する米国に行くことを決めたという。滞在中は寮生活のため、多様な価値観を持つ人との同居は「長い時間を共有する友と呼べる友人に巡り合えた」と述べる。

その他、留学を生かした就職活動や「OBFF」対策についてのセミナー実施が行われた。これらは、「初めて参加する留学フェアは、参加者にとって有意義な機会となった」と語っている。

学生生活の助けに

諸施設新設

中央教育研究棟に、日比谷松本校にSURWAYが新たに開設された。これら他大学の食堂、複面調査を行なったとのこと。その際に調べたのは、価格や味、ボリューム、店内の雰囲気、スタッフの対応等である。竹島芳枸委員は「学生の方々にとって有意義な場所になる大学生活の充実に繋がることを期待しています」とコメントした。

新施設の利点を見極めるには、実利用してみることが求められる。だが、今回は試験期間中であるため、同じ時を分かち合った旧友との絆をいつまでも大切にしたい。（響）

研究最前線

学習院 学問研究のいま

「美と戯れる－やきものの魅力－」

文学部哲学科　荒川 正明教授

PROFILE
学習院大学大学院文科学専攻修士課程修了。出光美術館主任学芸員を経て、08年より現職。
◇　先日は、日本陶磁史を専門に研究されています。今回は、工芸品と人の関係、また先生のライフワークにされている近代陶芸の巨匠・板谷波山の研究について伺いました。

（取材・構成　久木元若鳳）

日本人と美

古くから日本人は、うつわに神が宿ると信じ、そこに神の依代として、山水や花樹などの美麗なモチーフを表した。現代でも、大事な客を家に迎える時には、とっておきのうつわが使われる。こうした工芸品に対する感覚は、西洋人には異なるものだ。また、芸術の捉え方にも、西洋と日本では相違点が見受けられる。

「これまでの美術研究では、美術と工芸を区別する風潮がありますが、本来の日本文化では両者は分け難いものなのです。例えば、明治時代のトイレには非常に美しい装飾が施されたものがありました。これは西洋的な価値観からすると美とは言えませんが、しかし、美しさを求めるからこそ作られたのに違いないのですから、美術史の対象になると私は考えます」

このように西洋においては、飾るための美術と、使うための工芸とは、きっぱり区別されてきた。一方、日本の工芸品は、人間の暮らしに近い部分で展開してきたのです。

板谷波山

先生は、板谷波山の研究を学芸員時代から続けている。きっかけは、波山の展覧会を担当したことだった。著書や作品集を飾りました。美しい仕器に作（板谷波山の生涯）は、「HAZAN」という映画にもなった。波山は近代陶芸第一人者で、52年に陶芸家としての文化勲章を授与されている。

「波山は、それまでのやきものには西洋的な芸術スタイルを本格的に取り入れた人物です。東洋の伝統陶芸と、西洋のアール・ヌーヴォーという美術様式を見事に融合させました」

江戸時代までに見られた、視覚的に「型」を定めて、まさに継いでいくスタイルとは違い、彼の作品は自身の美意識からデザインされている。それは東洋陶磁の造形性を骨格に持ち、ロマンチックな意匠が加えられている。色彩や彫刻を施した文様表現は、過去に類を見ないものだった。

さらに、波山は作品によって多くの人々の心を癒している。30代から50年代にかけて、蟹の お生命のために杖を向百本も配った。また、戦没者の遺族達へ香炉や観音像を贈った。先生は、彼を「20世紀芸界の頂点を極めた作陶家」と称している。

現場を大事に

工芸の研究では、うつわの活かされている空間を訪れたり、陶芸家に話を聞いたりするなど、現場に行くことが不可欠である。これは我々生徒の勉強にもいえる模様。その際になるべくさらに明らかにされるだろう。


やきものに関する先生の著書

そして問題意識だという。

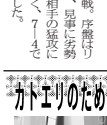
「独自の美感や思想が見つかると勉強はどこも同じなので、自分自身の感動や疑問を大切にしてください。感性や価値観をしっかり身に付ける朔間が学生時代だと思います。研究者には、特にそうした二ーンな視点を持っていてほしいと求められます」

荒川教授は現在、近世以降のうつわに、古代、中世の生活習慣や思想が反映されていることに注目し、暮らしに密着した工芸の在り方を探っている。日本の工芸に脈と受け継がれている美意識や思想が、先生によってさらに明らかにされるだろう。

暮らしを彩る工芸

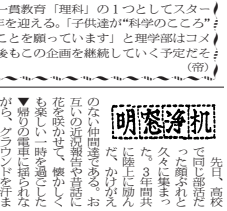
秋季リーグ戦、序盤はリーグ戦が始まり、昨年は第4位の成績を残した。今年も意気揚々としたインパクトが来場者を魅了した。

紙面紹介



秋季リーグ戦、序盤はリーグ戦が始まり、昨年は第4位の成績を残した。今年も意気揚々としたインパクトが来場者を魅了した。

初等科理科研究体験



9月3日、南7号館の実験室にて、学習院初等科5年生を対象とした理科研究体験「科学の日・科学のこころ」が開催された。この催しは、理科と触れ合う機会を通して、自然科学の奥深さや面白さを体感してもらうことが狙いである。今年度は70名の意欲盛んな生徒が参加し、生命科学・化学・物理分野の実験を行った。

本企画は学習院一貫教育「理科」の1つとしてスタートし、今回で10周年を迎える。「子供達が"科学のこころ"を持って成長することを願っています」と理学部はコメントしており、今後もこの企画を継続していく予定だそう。（帝）

カトエリのためいき

明恕浄抗

先日、高校同じ部活だった顔ぶれと久々に集まった。3年間共に陸上に励んだ。かけがえのない仲間達である。お互いの近況報告や音話に花を咲かせて、懐かしくも楽しい一時を過ごした。▼帰りの電車に揺られながら、グラウンドを汗まみれで走り回った日々を思い返す。きつい練習メニューをこなし、他愛ない話題で盛り上がっていた毎日。そんな想い出は、非常に輝かしいものに感じられる。あの頃からも2年が過ぎ、それぞれの道を歩んでいるのだ。まさに光陰矢の如しである▼学生活動を通じて、様々な人と触れ合い、自分自身もかしずつ変わっていく。戻れない過去を寂しく思うが、この繰り返しで人は成長を遂げるのだろう。今後も社会人生活なら新しいスタートラインに立つことになり、新たな人間関係を築くことが求められる。だが、今の仲間はもちろん、同じ時を分かち合った旧友との絆をいつまでも大切にしたい。（響）

部員の物まねが流行し、和気あいあいとした部室。そんな雰囲気だから、連日の部時半コールも乗りきれているのです。他の皆にとっても、はぁ～落ち着く…って感じの場所であったら嬉しいな。（翔）

情報特急便

第20回就職セミナー
「面接対策事前セミナー（自己分析）」
日時：11月27日（土）
13時～（2時間）
場所：西5号館B1・201・202・302
303教室
対象：3年生・M1年生就職希望者
「エントリーシート実践編」
日時：12月11日（火）
18時～（90分）
場所：西5号館B1・201・202教室
対象：3年生・M1年生就職希望者

第21回就職セミナー
「業界研究」
日時：12月14日（火）
13時～（2時間）
場所：西5号館B1・201・202・302教室
対象：3年生・M1年生就職希望者

第41回 大学祭

初夜祭

【29日 ピラミッド広場ステージ】

大雨の影響により、前夜祭は残念ながら中止となった。初夜祭は開催が危ぶまれたものの、無事に実施された。今回の目玉は、「G−1グランプリ」と称したお笑いの本学ナンバーワンを決めるイベント。特設ステージ上に、お笑いグループ6組が集結した。

最初に登場したのは、女性2人組の「富澤ヴィットくん」だ。とあるテレビ番組の内容を引き合いに、軽快なトークで観客の笑いを誘う。ツッコミとボケのバランスも良く、あっという間に漫才を終えた。

次々に渾身のお笑いが披露される中、颯爽と1人登場したのは「毛利豪」。彼はトークのアップダウンの激しさで、会場の笑いを引き出す。そして、ラストを飾るのは営科2年生コンビの「大ちゃん・佑ちゃん」だ。彼らは恋愛シミュレーションをネタに、身近な内容を繰り広げた。

すべてのお笑いが終わると投票に移る。集計が終わるまで、出場者の大喜利が行われた。様々な問いに対し1人ずつ答えを出すと、会場は笑いに満ちた。いよいよ結果発表の時間になると、ステージ上には緊迫したムードが漂う。そして、見事初代G−1に選ばれたのは、初めに登場した富澤ヴィットくん。フレッシュ感溢れ、完成度の高い漫才を披露した彼女らに賞品が贈られると、満面の笑みがこぼれた。

こうして初夜祭は盛況のうちに終了。肌寒い季節の中、会場は温かみに包まれていた。（伊藤友喜）

毎日が発想の源

鈴木おさむトークショー

【30日 西5−B1】

降りしきる雨の下、鈴木おさむさんのトークショーを聴くために多くの人が集まった。「台風の中せっかく来てくれた皆さんには、話す予定じゃなかった話もしますから」と軽妙に語るおさむさん。会場を和ませつつ、さっそくトークが始まった。

鈴木おさむさんは、今をときめく売れっ子放送作家である。番組の構成や台本制作を担う、言わば番組作りの影の主役だ。彼が手掛ける『笑っていいとも！』や『SMAP×SMAP』などは誰もが一度は目にしたことがあるだろう。幅広い視聴者に向けた仕事をしていく上で、彼は好奇心と行動力を大切にしているという。

喋りも舌好調のおさむさん

19歳の時、おさむさんはテレビの向こうの世界を作る仕事に憧れてこの職を志した。しかしアイデアが浮かんだとしても、社会に出たばかりの青二才の意見は聞いてもらえない。そこで、彼は周りの大人達の関心を引く方法を考えた。まずは興味のままに自分の知らない世界へ飛び込み、話題の引き出しを増やしていったのである。例えば映画を観ることもその1つだ。普段は観ない類の映画を鑑賞して話を広げ、会話のきっかけ作りをしたそうだ。

また、未知の体験に挑むか否かには、大きな差があると説く。彼は35という歳で小説の執筆に初挑戦するが、それはお笑い芸人である品川祐さんが後を押したものだ。品川さんは、著書『ドロップ』を出した後「皆、小説を書こうと思ってたって言ってるけど口だけだよな」と漏らす。その言葉に、おさむさんは耳が痛くなった。「やろうと思ったとやったは全く違う、と指摘されて歯がゆい思いでした。だから僕も、実際に小説を書いたんです」。まさに、好奇心と行動力は彼の活躍に繋がっている。この2つは、放送作家でなくとも全ての人々が持つべきものなのだろう。

そして、話題は夫妻の馴れ初めや日常へ移る。「好奇心のMAXが奥さんとの結婚だったんです」との一言に観客はどっと沸いた。もちろん、奥様とは森三中の大島美幸さんだ。大島さんとの生活は、彼に様々な良い刺激を与えている。

特にクリスマスの思い出は印象深い。おさむさんは手作りのズボンを貰ったお礼に、何でも買っていいと言って、選ぶ物は大島さんに任せた。しかし、彼女はそれを拒否する。理由を尋ねると「相手はどうしたら喜ぶのかを考えることが贈り物の醍醐味」と答える。さらに「何が欲しいかというサインは常にその人が発している」と伝えたそうだ。彼は自分にはない考え方に、はっとさせられる。最も身近にいる妻の気持ちを見過ごしていたからだ。「人を楽しませる仕事をしているのに、いつも一緒にいる奥さんも喜ばせられないのか」と悔やんだ。彼はこれを機に、言葉の中に隠された思いを汲み取るように努めていると語った。

最後に観客へサイン色紙のプレゼントが行われ、盛況のうちにイベントは幕を閉じる。ユーモア溢れる語り口に客席からは笑いが絶えず、その言葉の端々には私達へのエールが感じられた。チャレンジ精神に満ちた彼の人生は、好奇心と行動力、そして妻、大島さんによって支えられているのだ。（森田祥乃）

古典の妙をあじわう

落語研究会

【全日 西1−301】

大学祭初日の午後、落語研究会は恒例の襲名披露を行った。今回襲名するのは3名。OBによる笑いを交えた紹介後に、演目披露が始まった。

最初に登場したのは十二代目目白亭白痴さん（史2）で、演目は『宿屋の仇討』。使用人の伊八は、侍と3人の町人を同じ晩に泊め、双方の要望をなんとか叶えていた。何事もなく時が過ぎるかに思えたが、町人の歓談を漏れ聞いた侍の一言で事態が急変する。生命の危機を感じる宿屋の人々に、侍はさらなる衝撃を与えて去るのであった。元々この作品の雰囲気が好きだったという白痴さんは「有名な演目は、先人達のアレンジを学んでさらに自己流にやることができます。それが楽しいですね」と感想を述べる。「伊八、伊八！」と呼び出され渋々動き回る表現に、会場は何度も沸いていた。

語り口に熱がこもる

続いて、十代目目白亭殿下さん（日2）が『頓馬の使者』を披露した。女房を溺愛する八っつあんは、熊さんに騙されて遊郭へ行き、怒った妻に家を追い出される。その後、彼女が病で急死したことを、八っつあんに伝えなければならないのだが…。この演目は、映画監督の山田洋次氏が五代目柳家小さん師匠に書き下ろした作品である。「やっている噺家さんが少ない分、難しいのですが頑張りました」と殿下さんは話す。八っつあんが泣く迫真の演技に観客は呑まれた。

部員によるお囃子教室や大喜利、柳家小団治師匠の公演を挟み、最後の演目が披露されたのは三代目目白亭たぬきさん（日2）である。上演作品は『田能久』だ。これは偶然にも、共に一晩を過ごすことになる化け物と人間の噺である。息をつかせぬ展開に、聴衆は惹きつけられる。民話をもとに作られたこの噺は、初心者でも馴染みやすい。「元々、昔話に興味がありました。中でも、人間ではないものが主役級に扱われているこの作品は、面白いと思いました」と彼女は語ってくれた。この日、たぬきさんは体調不良のため少々辛そうな様子。しかし、良く通る声を張り上げて見事にトリを務めあげた。

襲名披露は盛大な拍手のうちに終演を迎えた。落語の魅力は一言で表せない。確実に言えるのは、そこには観客と一体となって古典の世界を楽しみ、笑いを共有する空間が広がっていたということだ。（山森舞）

熱狂の大型イベント

青山テルマライブ

【31日 百周年記念会館】

青山テルマライブツアー2010〜学園祭ライブ〜と称して行われた今学園祭ツアー。本学でのイベントは、8公演目となる。観客も学生にとどまらず、一般層も数多く見られた。会場内での限定タオルやCD等の物販も賑わっていて、人気の高さがうかがえる。

開演前の高まった気分からか、若干ざわついた会場。そんな雰囲気は、照明が消えていくと同時に落ち着いていく。ステージが照らされて歓声が沸くと、ダンサーの華麗な踊りが披露され、青山さんが舞台に姿を現した。そして間髪を入れずに『ONE WAY』『WANNA COME AGAIN』『何度も』を歌い上げる。1曲目では手拍子が会場全体で起こり、聴衆はオールスタンディングで盛り上がった。『何度も』では、ステージが照明でピンク色に彩られ、幻想的な空間が作り出される。そんなムードもあってか、ホール全体が歌に酔いしれた。

青山さんの力強い歌声に会場は大いに沸いた

最初の3曲が終わると、青山さんの自己紹介があり、「今日は楽しんでいってください」と呼び掛けた。そして、次の曲が始まる。『大っきらい でもありがと』では、しっとりとした空気が会場を包み込んだ。続けて『忘れないよ』が演奏される。青山さんは、時には体を激しく揺らしながら、バラードを歌い上げた。

次のMCでは、新曲『23』を10月27日にリリースしたことを発表。曲を書いた時の気持ち、込めた想いを熱く語ったところで歌に入る。魅力的なダンスと歌詞がとても良く合っていて、曲に盛り込まれている意味がひしひしと伝わってきた。続けて『Paradise』『Happiness』を熱唱する。曲のサビの部分では、手を左右に振って、会場全体で盛り上がった。さらに、4人のダンサーとの息の合ったダンスも見せてくれた。

ライブも後半に入ると、ハロウィンの話へ。この日は当日ということもあり、観衆の興奮を感じ取ることができた。すかさず、青山さんが「ハロウィンと言えば、今日はいつも私の仮装をして下さっている方がここに来ています」と言い放つ。周囲の視線が客席へと向くと、白い衣装に身を包んだモノマネ芸人の橋本まさをさんが登場する。彼がステージでパフォーマンスを見せると、会場は大いに熱狂した。橋本さんの退場後、青山さんが特製タオルを持ち出し、「タオルを力いっぱい振って盛り上がって」と促した。

そんな中始まった『サマーラブ!! feat. RED RICE from 湘南乃風』は、見事にタオルが活躍した曲。これまで静かに聴き入っていた2階席も一緒になってタオルを回し、ホールは熱気を帯びた。曲が終わった後の「次の曲が最後です」の言葉に名残惜しむ声が響く。そして『二人の約束の日』が演奏され、青山さんはステージを降りていった。

しばらくすると、アンコールの声がホール全体にこだまする。それに合わせ、青山さんが舞台に再度登場し、「そばにいるね」を和やかに歌った。演奏後、青山さんは一度舞台袖に引き上げ、カボチャの仮装で再び舞台に上がる。そして、ステージ上から4人のゲストを呼び、客席全体との記念撮影を行った。その後、『LET'S PARTY』を熱唱し、大歓声の中終演した。

ライブはアーティストとファンが想いを共有できる素晴らしい時間だと思う。イベントを通じて、新たな視点を得ることもある。今公演で、青山テルマさんの魅力がより深まったことだろう。（山田晃）

若者へのメッセージ

小泉進次郎氏　時局講演

【30日 西2−201】

国際政治研究会主催で、今年も時局講演が開催された。今回のゲストは、自由民主党衆議院議員である小泉進次郎氏である。初めに「ごきげんよう」で笑いを誘った小泉氏は、予定より質疑応答に時間を割くことを提案。次世代の政治家として、対話を重視しているためだそうだ。

最初の話題は、学生時代に熱中して良かったと思えることについてであった。氏にとってのそれは、野球だという。当時はプロを目指し、一途に白球を追いかける充実した生活だったそうだ。後に、その夢が現実的でなくなるも「燃え尽きることはありませんでした。なぜなら、新しい情熱の注ぎ口を見つけたからです。それが、政治です」と現在の職業に懸ける意欲の高さを語る。続けて「あの打ち込んだ時間が、議員になる時の壁を乗り越える力となりました」と、しみじみ述懐していた。

次に、その政治に関する意中を「自民も民主もカンケーない」というフレーズに絡め、身ぶりを交えながら熱弁を振るう。国民の望みを「国の発展」と考える氏は、政党の枠に囚われるべきではないという信条を持っている。そのことに対して、党の先輩達から批判を受けたこともあったそうだ。しかし、討論を重ねるうちに、この信念も理解されるまでに至ったのだという。揺るぎない氏の姿勢が垣間見えた逸話であった。

そして講演は、我々学生へのメッセージに続く。そもそも、今の代議士としての立場は、幼馴染みの協力なくして語れないと氏は述べる。そうして「出る杭は打たれるという言葉もあるが、杭同士で頑張ることもできる」と若者に友情の尊さと積極性を訴えた。逆風の中迎えた総選挙で、無二の親友の力を借りて当選できたという氏の言葉には、自然と力がこもっていた。

力強く日本の将来を語る小泉氏

講演が一段落すると、質疑応答に移る。氏は、政治関連の疑問には国会答弁のように、プライベートな質問には冗談を交え、返答していく。その調子で来場者達との言葉のキャッチボールが矢継ぎ早に交わされるも、ついに終了時間が来てしまう。それでも挙がる多くの手に、氏は自ら延長を申し出た。そして「休日には何をなさっているのですか」という質問が、最後に投げ掛けられた。これに対して、氏は真っ先に読書と草野球を挙げる。サーフィンもしたいそうだが、「週刊誌に『政治で波に乗れない自民党だが、進次郎は波に乗る』って書かれてしまいます」と悩みを告白。会場を笑いに包むオチをつけ、本学を後にした。

若手のホープとして注目を集める小泉氏。時には二世議員というレッテルで扱われ、苦労することもあったそうだ。だが、この日は苦難を努力で乗り越え、政治の最前線で奮闘する等身大の姿が伝わる話ぶりであった。氏のさらなる活躍が期待される。（石塚貴之）

喫茶

めぞふぉる亭

【全日 西2−403】

毎年恒例である音楽部の喫茶「めぞふぉる亭」。会場は賑わいを見せ、今年も美しい音色とそれに合ったお菓子を提供し、来場者の心を和ませてくれた。

演奏は、15分ごとに奏者を交代して行う。席に着いてのんびりとしていると、バイオリン・ファゴット・オーボエ・バスクラリネットの繊細な音色が聴こえてきた。その後はアンサンブルに加え、アカペラを織り交ぜるなど意匠を凝らし、聴衆の飽きる姿を見ることはなかった。また演目も、クラシック、ドラマのテーマソングなど、様々なジャンルを網羅。重層感漂うものからテンポの良いものまであり、場に合う音楽を常に作り出してくれる。料理はケーキ、クッキー、ホットサンドなど種類が多く、演奏と合わせて楽しめるようになっていた。加えて、店の装飾は明るく施されており、より癒しを与えていた。また、普段の活動風景を展示し、音楽部のことをより知ってもらうことも重視したという。

この時期は、間近に迫った定期演奏会に向けて練習の真っ最中であることから、部員は多忙を極める。そのため、皆の協力なくして喫茶を運営することはできない。厳しい状況ではあったが、学祭責任者の加藤恵子さん（心2）を中心に力を合わせ、無事に当日を迎えるに至った。これについて加藤さんは「行事が重なり大変でしたが、皆の結束力のお陰で成功を収めることができたと思います」と力強く語ってくれた。仲間との絆を再確認した大学祭となったようである。

年間の一大イベントを終え、日々練習に真摯に取り組む音楽部。今後は音楽活動に専念した、部員達の奏でるハーモニーに注目が集まる。（飯村渉）

黒猫

【全日 西1−206】

西1号館の一室を訪れると、居心地の良い空間が広がっていた。文芸喫茶「黒猫」は「気軽に入れて、落ち着いて飲食できる喫茶」がコンセプト。提供する物は、毎年受け継がれるレシピに基づいて作られた逸品だ。流れる音楽もゆったりとしたクラシックやジャズなど、徹底したこだわりを見せる。

何を頼もうか、とメニューを覗くと豊富な種類が揃えられていた。紅茶の茶葉からケーキのトッピングに至るまで、様々な組み合わせを試すことができる。例えば、紅茶はストレートであれば、アールグレイとダージリンの2種類から選べる。また、ミルクティーはアッサムの茶葉を使用しているそう。コーヒーは、室内の一角に設けられたバーでドリップしたものだ。ケーキは手作りで、チョコレートとレアチーズの2種類が用意されていた。どちらも適度な甘さで、特に後者はとろけるような食感で絶品と言える。美味しさの秘訣を伺うと、毎年研究を重ね、改良を加えているためだという。

ケーキセットが届くまで、余興としてトランプを使ったマジックを披露してもらった。以前は待ち時間に文芸冊子を読んでもらうのみであったが、より喫茶を楽しんでもらうために、昨年から部員の要望で試みられている。もちろん、待ち時間はマジックだけを堪能するのではなく、空想にふけっても良いし、部員の力作を読んでも良い。彼らの描く作品は私達を虚構の世界へと誘い、現実を忘れて想像を羽ばたかせる手助けをしてくれる。こちらも、喫茶のお供として好評を博していた。

祭りの喧噪から少しばかり離れ、心の栄養を取る。日常と非日常の狭間の不思議な空間を、思う存分満喫するのもなかなか良いものであった。（山森舞）

絆が紡ぐ伝統

民族舞踊研究会

【31日 ピラミッド広場ステージ】

異国の民族衣装と独特の動きが持ち味の民族舞踊。大学祭最終日、小雨が降る中で民族舞踊研究会によるデモンストレーションが行われた。

公演は様々な国の踊り、全8曲で構成されている。最初の曲は、ルーマニアの『ブルピッツァ』。足を複雑に動かしながら円形になって踊る姿からは、楽しそうな様子が伝わってくる。同国の女性のみで舞う『クリハルマ』は、可愛らしい衣装と軽やかなステップが印象的だ。それとは反対に、ハンガリーの『ポントゾー』は男性による舞踊である。リズム良く体を叩き、足を高く上げるダイナミックな動きには、圧倒されるばかりだった。

また、6曲目には誰もが馴染みのある『トップ・オブ・ザ・ワールド』が使われていた。今までのテンポの速い曲想から一転、落ち着いた曲に合わせて男女ペアがゆったりと円を描きながら踊る。静かだが力強い様子からは、先ほどまでの舞いとはまた違った一面が見られた。

真摯な眼差しの部員達

そして、公演の最後を飾るのはロシアの『カテリーナ』である。この曲には男女それぞれにソロが用意されていた。まずは、女性パートから始まる。指先に布をつけステップを踏みながら舞う彼女達は、会場を一瞬で華やかなものにした。その後、男性ソロの見せ場であるコサックダンスが披露される。さらに、クライマックスでは男性が女性を持ち上げる大技も繰り出され、観客からは感嘆の声が上がった。まさに、有終の美を飾るにふさわしい演技となっただろう。

公演後、委員長の堀畑宏明さん（物2）は「生憎の天候ではありましたが、今までの練習の成果を発揮することができて本当に良かったです」と喜びの心境を語ってくれた。部員10名という少人数での準備は、苦労の連続だったそうだ。そんな彼らを支えているのは、現在まで続く民族舞踊研究会の長い歴史である。民族衣装や振り付けは、代々先輩から直接受け継がれたものだ。「自分達も先輩方が守ってきたものを、後輩に伝えていきたいです」と、今後の意気込みを語ってくれた堀畑さん。これからも、仲間と途切れることのない強い絆を築いてほしい。（深澤知代）

甦る江戸の風情

国劇部

【31日 富士見ホール】

今回、国劇部が披露する歌舞伎の演目は、近松門左衛門原作の「恋飛脚大和往来」である。開演前「演技をするという点では素人ですが、少しでも上級生達に近づけるように頑張ります」と主役の巽久典さん（済1）は、真剣な面持ちで語った。本公演は1年生主体で行われ、彼らにとって初の晴れ舞台となる。

飛脚屋の亀屋忠兵衛は、遊女の梅川と親密な関係であった。そんな折、丹波屋八右衛門という男が、大金で彼女を身請けするという噂が流れる。忠兵衛はこの話を聞くと、慌てて50両を工面し、身請けの手付金として支払った。しかし、残金を払うことができずに時だけが過ぎていく。

ある日、忠兵衛は堂島の屋敷に納めるべき為替の金を持ったまま、梅川のいる井筒屋という遊女屋を訪れる。その女将の計らいで、2人は逢瀬を果たす。初めは、長い間会いに来なかったことに対して梅川が怒り出した。そこから痴話喧嘩へと発展するが、相思相愛の両人はすぐに仲直り。互いに寄り添いながら愚痴をこぼす姿が何とも滑稽で、観客の笑いを誘う。

情緒溢れる舞台

しばらくすると井筒屋へ八右衛門がやって来て、身請けの話を店の主人に持ち掛けた。だが交渉がうまくいかず、気分を害した彼は忠兵衛の悪口を言い始めた。それをきっかけにして、舞台上で彼女を巡る激しい言い争いが繰り広げられる。歌舞伎独特の間の取り方と、緩急をつけた双方の絶妙なやり取りは、見る者の目を釘づけにする。口論の末、忠兵衛は持っていた為替の封を切り、その金を使って身請けの残金を払ってしまった。

梅川の身を引き取ることはできたが、「封印切り」は当時死罪に値する行為であった。それまでの喜劇的な展開から一転して、重苦しい空気が立ち込める。事情を話すと、彼女は共に命を捨てる決意をする。店を出て、もう戻ることのない井筒屋を振り返る忠兵衛。その姿に悲壮感を漂わせたまま、演者は舞台の袖へ消えていった。

演劇を終えて「実際に演じることの難しさを痛いほど感じました」と巽さんは話す。前半と後半で対照的な世界観を描き出す本作。彼が言うように、歌舞伎を始めて間もない1年生にとって難解な演目だったに違いない。全力で打ち込んだ彼らの奥ゆかしい演技は、日本古典の趣深さを堪能させてくれた。（榎本元気）

映像で魅せる

映画研究部

【全日 西2−503】

多くの団体が集まる西2号館の片隅に、映画研究部の上映室がある。室内では、部員が制作した映画を鑑賞することができる。

初めに、様々な撮影方法に挑戦したカメラ講習会作品が披露された。中でも独創的なのが『めがね』だ。テーブルを囲んで雑談する4人の女子学生を眼鏡で擬人化している。机上に置かれた4つの眼鏡を1コマ毎に動かして撮影し、それらを繋げて動く様子を表現した。他愛ない話で盛り上がるその姿は、女子同士の会話を巧みに描写していた。

続いて、樽見哲哉さん（史4）主演の『アイスリミット』が始まる。青年は、アイスクリームを冷やそうとした時に冷凍庫が故障していることに気づき、思わず叫ぶ。「冷蔵庫、壊れてる〜！」そこで彼は、アイスが溶ける前に修理に出そうと考えた。だが、途中で靴が高い塀に乗ってしまい、行く手を阻まれる。途方に暮れて部室に戻ると、コンセントが抜けているのを発見し、プラグを差し込む。すると、ブレーカーが落ちたという話だ。脈絡もなく慌てて校内を駆け回り、電気屋へと急ぐ彼の動作が滑稽だった。

高校生の頃の主人公（『黒い玉』より）

そして、今回の目玉となるのが『黒い玉』である。主人公は、自身の純粋さゆえに周囲の心の変化を受け入れられない女子高校生だ。ある日、彼女は夢の中で、ベビーカーを押す主婦の口から赤い液体と共に黒い玉が出てくる場面を目撃する。さらに、現実でもそれを見てしまうようになり、大学入学後もこの現象に苦しめられる。

そんな彼女は、1人の男子学生に出会う。黒い玉が出てこない彼に対して彼女は徐々に心を開き、懇意になった。しかし、彼の自宅を訪れた際に突然、彼がせき込み始め、黒い玉を吐き出す。彼女はためらいがちに、それを両手で受け止めて飲み込んだ。それからは、その玉を見なくなり、人々に対する不安からも解放されたのだった。

この映画は、監督の村上拓磨さん（物3）が幼少期に見た夢がもとになっている。大人になることへの拒絶や、成長する過程で失うものへの恐怖を黒い玉で表現していたのだ。

楽しんで撮影することを心掛けているという本研究部。そのため、部員達の映画に対する思いが込められた作品ばかりである。個性溢れる映画を堪能できる上映会だった。（増山詩織）

後夜祭

【31日 ピラミッド広場ステージ】

天候の影響を受けやすいこの季節。30日に開かれるはずであった中夜祭は、台風の接近により、残念ながら中止を余儀なくされた。そして翌日の後夜祭は、小雨の降る中での実施となった。今回メインイベントとなる「歌唱力コンテスト」は自慢の歌声を披露し、投票により順位を決める。

最初にステージに登場した「とろろ」は男女5人によるユニットだ。彼らは、ザ・ピーナッツのヒット曲『恋のバカンス』をリズム良く歌いきる。次々に名曲が歌われる中、最後に現れたのは女性グループ「てぃむすきー」だ。彼女らは、プリンセスプリンセスの『M』をアカペラで熱唱。会場からは大きな歓声が上がり、全組の発表が終了した。

そして本学トップを決める投票が始まった。堂々、優勝に輝いたのは、最後に登場した「ていむすきー」。彼女らの歌声は、多くの観客の心を掴んだのである。

次に来場者の支持が高かった団体を発表する「出店コンテスト」が行われた。見事、優秀賞を受け取ったのは、揚げアイスを販売したZealousであった。

いよいよ後夜祭も終盤。最後に大学祭実行委員会委員長、内藤穣一さん（済3）から閉幕の挨拶が行われると、大きな拍手が送られた。そして大学祭のラストを飾る、花火が打ち上がり、後夜祭は無事フィナーレを迎えた。（伊藤友喜）

のんべえ横丁

大学祭は、1年間で最も盛り上がるイベントだろう。多数の個性豊かな団体が出店や展示をし、3日間に渡って大学全体が華やかになる。だが、その中でも少し雰囲気が異なる空間がある。それが「のんべえ横丁」だ。このエリアでは、特別に飲酒が許されている。お酒の販売を許可された団体は、ここでおつまみなどと一緒にビールを売るのだ。

北1号館と中央教育研究棟の間に設置された、横丁ブース。今年は中南米研究会や文学部日本語日本文学科の4年生による有志など、計12の団体が並んだ。

それでは、のんべえ横丁の様子をお伝えしよう。初日は、平日ということもあり、学生で賑わっていた。売り子も楽しそうに接客する。夕方になると、テントのライトや提灯が灯り、横丁に人が集まり始めた。ここからが、一番活気づく時間帯だ。店員も、販売や調理に躍起になる。広場やテーブル席では、ビールを片手に頬を赤らめ、友人同士で談笑している姿が数多く見受けられた。

2日目は、台風の接近により出店を行う全ての団体が15時以降、活動禁止となった。横丁は、前日とはうって変わって閑散とした空気が流れる。開店の準備をしていた人は、残念そうな表情を浮かべていた。

朝からすっきりしないお天気模様の最終日。しかし、晴れ間も見せるくらいに回復すると、祭も盛況を取り戻した。横丁はと言うと、大学祭一の活況を見せ、行列が生まれるほどである。中でも、ラビッシュが販売していたチャーシュー丼は大人気であった。

普段飲酒が禁止されている大学構内。そこでお酒を飲むことに不思議な気分になりつつも、友達との乾杯でビールが一層美味しく感じられた。これが、のんべえ横丁の人気の理由でもあり、また醍醐味と言えるものなのだろう。（伊藤友喜）

展示

写真部

【全日 西2−ロビー】

一瞬を切り抜き、永遠の形に残す。そんなカメラの所産を展示する催しが、今年も写真部によって開かれた。

会場は過度な装飾を施さず、作品自体をじっくり鑑賞できる造りになっていた。それだけ自負心を持って掲げていたのは、各部員自選のモノクロ写真である。それは、撮影から印刷操作までを一人ひとりが行い、やっと完成する。個性が発揮されやすいため、味わい深い作品が多い。例えば、石柱に乗る猫など、日常の一コマを抜き取っており、普段は見落としてしまう一面を覗かせてくれる。また「今回は全体に彩りを与えようと、カラー写真を何点か加えることにしました」と秋山直樹さん（哲3）。そのため今年は、鮮やかな一輪のひまわりなどが、モノトーンの世界に色調を与えていた。

写真部は個人の自主性を尊重し、テーマを決めることはしないのだという。あくまで撮影者の琴線に触れた作品を出展しているのだ。すると、自己主張のあまり、展示会の調和が乱れると考えてしまう。だが会場を見渡せば、水遊びをする子供など、どこか往時を想起させる光景が飾られ、統一感を保っていることに気づく。残したい刹那の焦点は、重なり合うのだろう。

デジタル化の進む現在、部員達はフィルム生産減少という向かい風にも負けず、レンズ越しに覗いた世界を披露している。白と黒だけでなく、その濃淡で表現するモノクロ写真。その魅力を存分に表現し、観る人を惹きつけていた。（石塚貴之）

陶芸研究会

【全日 西2−203】

西門を通ってすぐの販売会場では多彩な陶器が並べられ、道行く人を集めていた。話を聞くと、ここだけではなく西2号館で展示も行っているらしい。

さっそく、そちらの会場に移動する。そこは音楽が流れ、落ち着いた雰囲気であった。1年生から3年生までの作品が学年、テーマごとに分類されている。それぞれに個性があり、そのネーミングやコメントは、思い入れの強さがうかがえるものばかりだ。「昨年までは個人に任せて、自由に作ってもらいました。今年は学年ごとにテーマを設け、展示方法も工夫しています」と副委員長の須藤理那さん（営3）は語る。技術的な側面は、実際に陶芸に携わる者にしか分からない。来場者にも理解しやすいようにすることで、より楽しんでもらう狙いだ。

目を惹いたのは、3年生による『染付』の作品群だ。美しい白地を基調とした、様々なモチーフの陶器が奥の一角を占めている。ろくろを回す時は遠心力が掛かり、生地が外側に広がりやすい。そのため、平たく薄くすることが非常に難しいのだ。さらに、『染付』は青の絵具で模様を描いていく。工程が1つ増えるため、作品を作り上げるのに時間も注意力も必要とされる。3年間の総決算として、さらなる技術向上を目指すために挑戦したそうだ。

ひとつひとつ眺めると、不意に心に触れる出会いがある。その感動を求めて巡るのも良い。見る者の目を楽しませる素晴らしい展示会であった。（山森舞）

美術部

【全日 多目的ホール】

美術部の今年の装飾のテーマは「不思議の国のアリス」だ。これは、同時に出店した喫茶と併せて制作したそうだ。この2つの装飾を統一するのは、初めての試みである。

室内には、至る所にアリスの登場人物達の切り絵が散りばめられていた。そんな可愛らしい空間の中には、部員が思い思いに制作した自由作品35点が並ぶ。美術部は、絵画・工芸・写真・彫刻・陶芸の5班に分かれて活動している。そのため、実に多彩なジャンルの作品が展示されていた。壁には油絵や水彩の絵画の他にも、各々でデザインしたエコバックやTシャツも掛かっている。どれも魅力的で、見応えのあるものばかりだ。そして中央のテーブルには、絵皿などの陶芸品や写真班による旧岩崎邸を撮影した共同制作が置かれている。独自の世界観を持つ作品の数々に、目移りしてしまうほどである。来場者は、静かに鑑賞しながら、芸術の世界に浸っていた。

さらに、西門前では毎年恒例となったオブジェが設置された。アリスを連想させるイラストと、愛らしいうさぎの姿は、大勢の人の目を楽しませたに違いない。

副部長の高倉浩一さん（済3）は「普段は個人活動が多いので、展示会は皆が一緒に作品を作る良い機会になっています」と大学祭の意義を語る。作品を複数出品している人も多く、会場からは部員の芸術に懸ける熱意が伝わってきた。彼らは、これからも技術を磨いていくことだろう。（深澤知代）

ROBIN

【全日 北1−403】

鳥の姿や鳴き声は、普段何気なく見て、聴いているだろう。このように私達は、無意識に鳥を身近な存在として把握している。バードウォッチングサークルROBINは、一層親近感を抱いてもらえるよう、趣向を凝らしていた。

部屋に入ると、観察する時に使用する様々な双眼鏡が最初に目に付く。これらは実際に手に取って覗くことができる。そのため、来場者もその精度に驚き、興味津々の様子であった。また、写真を多く並べたり、色・形などに特徴がある鳥を意図して展示したりと、目で見て楽しめるように工夫を施したという。

さらには、「鳶」「隼」「百舌」のような難読漢字のクイズを盛り込み、幅広い客層にまで気を配っていた。その他にも、クマタカという鳥の、全長160㎝にも及ぶ実物大の模型を正確に再現。本当の大きさを実感できるようにしていた。そして、とりわけ他の展示と違った印象を与えていたのは、翼についての分析である。生育環境によって異なり、それに基づき分類されるそうだ。このように、体験するものだけではなく、その裏側に隠された特色についても分かりやすく発表している。

代表を務める土肥洋佑さん（心2）は、今回の展示に携わって「大学祭に参加したことがなくて不安でしたが、様々な人に喜んで頂けたので嬉しかったです。これをきっかけに、私達の活動をさらに知ってほしいと思います」と語り、初経験ながら充実の3日間になったようである。来年も、彼らはフィールドワークを通して私達を楽しませてくれるに違いない。（飯村渉）

構成・レイアウト
大久保吉章
福井　麻斗

デザイン
森田　祥乃

取材
飯村　　渉
石塚　貴之
伊藤　友喜
榎本　元気
深澤　知代
増山　詩織
山田　　晃
山森　　舞

CAMPUS GUIDE

●輔仁会雑誌編集委員会
「第234号輔仁会雑誌配布」
日時：12月13日（月）〜17日（金）
場所：西門付近
料金：無料
PR：今号のメイン企画では、創刊120周年を記念して輔仁会雑誌を振り返ります。

●美術部
「学習院大学桜美会展示会」
日時：12月22日（水）〜26日（日）
10時〜18時（最終日は16時まで）
場所：世田谷区区民ギャラリーB
料金：無料
PR：美術部OBと現役が話し合い、合同でつくりあげる展示会です。出展者の年齢層が幅広いので、現役だけの展示会とはまた違った魅力があると思います。時間をかけて制作された作品も出展され、見応えもあると思います。よろしければ、是非足を運んでみて下さい。

●學習院大學應援團吹奏楽部
「第13回定期演奏会」
日時：12月19日（日）
開場13時30分
開演14時
場所：学習院創立百周年記念会館正堂
入場料：500円（全席自由）
指揮：今井順夫（当部常任指揮者）
曲目：「パリの喜び」
「不思議の国のアリス」
「メモリーズ・オブ・ユー」
「タイム・トゥ・セイ・グッバイ」
特別出演：野崎剛史（クラリネット奏者）
染谷太郎（パーカッション奏者）
學習院大學應援團チアリーダー部
PR：こんにちは、學習院大學應援團吹奏楽部です。今年も当部は「第13回定期演奏会」を右記の通り予定しております。皆様の御来場を心よりお待ちしております。

投打の力で白星を上げる

リーグにおける堅実な一勝

ソフトボール部男子

10月9日、国士館大学多摩キャンパス多目的グラウンドにて、男子ソフトボール秋季リーグの対桜美林大戦が行われた。本学は初回に先制されたものの、打線が冴え渡り逆転に成功。7―4で快勝を収めた。


相手の投球を見据え、痛烈な打球を浴びせた平山選手（左）

前回戦った時こそ桜美林大に惜敗した本学だったが雪辱を果たすべく、勝利への意識を高めていた。彼らは守備の連携プレーに磨きを掛け、打撃に関しては各個人の技術力向上を掲げて練習をしてきた。試合前に古関一史主将（化4）は「走攻守それぞれ本学のペースを保って戦いたいです」と語る。本学チームの、ミスを抑え手堅く攻めて得点するという特徴を生かすことで、優位に立つことを目指す。

冷たい小雨が降り注ぐ中、相手の先攻で試合は始まった。開始早々に先発の照山篤融選手（済2）は、3ベースヒットを打たれ、先制点を許してしまう。挽回を狙う本学は、裏の攻撃で先頭打者を出塁させ、1点を返すことに成功した。二回表が始まると、照山選手は制球が定まらず、打者を進塁させてしまう。しかし、野手の面々による絶妙なフォローで、桜美林大を無得点に抑えた。

1―1の同点のままで迎えた二回の裏、四球やレフト前ヒットなどでランナー満塁とする。そんな追加点の好機に打席に入った平山和也選手（史3）は、ライトの頭上を越す走者一掃の3ベースヒットを放つ。これによって3点を追加し、本学は一気に有利となる。古関主将はこの状況を「彼のこの一打でチームに勢いがつき、投手を楽にさせることができました」と笑顔で振り返った。

三回は、照山投手が本調子を取り戻し、相手に本塁を踏ませない。だが、四回には桜美林大の逆襲が始まる。まず、先頭打者がサードにライナーを浴びせる。さらに、あわやホームランかと思われるフライが打ち上げられた。これはレフトがフェンス間際で捕球するが、本学選手の間に緊張感が漂い出す。野手達は気を引き締めて守備に徹するものの、相手を抑えきれず、ライト前ヒットを浴びて追加点を許してしまう。続けざまに得点を奪われ、4―3という油断ならない展開になった。

点差を広げたい五回裏。走者一塁の場面で四番打者の北河拓也選手（法3）の打撃が、反撃の火蓋を切る。彼の放った強烈な打球はレフトのグラブを弾き、長打となる。これによって待望の追加点が入り、グラウンドは試合中で最も盛り上がった。その後もヒットや相手のエラーでこの回2点をあげ、6―3と再びリードを広げた。

桜美林大も、このままでは引き下がらない。六回表に照山投手はライトへの安打を許し、4点目を献上してしまう。四死球により一打同点の危機に陥ったが、後続を見事に打ち取り、リードを守る。相手の攻めを乗りきった本学は、着実にランナーを溜め、走者一、三塁の場面を作った。観衆の期待が掛かるところで、比嘉亮太選手（心2）がレフトへ打球を運び7点目を挙げ、相手を突き放す。

雨もすっかり止み、3点のリードで最終回のマウンドに登った照山投手は、落ち着いたピッチングで次々と打者を打ち取る。ついに最後の打者を見事に空振り三振に抑え、本学は7―4で桜美林大を下した。

古関主将は試合の勝因について「抑えるべき場面を守り通し、得点のチャンスを生かせたことです」と述べる。まさに、全員一丸となって掴んだ勝利だった。これからも彼らは、結束力による快進撃を見せてくれるはずだ。

（菅家優）

後半の反撃及ばず

サッカー部


一心不乱にボールを追いかける江森選手（右）

10月24日、東京大御殿下グラウンドにて、東京都大学サッカーリーグ戦が行われた。対戦相手は玉川大である。本学は1部に在籍していたが、今までのリーグ戦の結果により、2部に降格することが既に決まっている。それでも、今回の試合は4年生にとって最後の公式戦であり、勝利で締め括りたい。「とにかく勝つこと、これだけを意識して臨みたいです」と竹下将之主将（政4）は、強い意志を表明した。

曇り空が広がり、肌寒い空気が立ち込める中、キックオフの笛が吹かれた。立ち上がりから、本学は互いに指示を出して攻撃を組み立てていく。そんな中、前半4分には永田直樹選手（政4）から、左サイドを駆け上がる江森亮太選手（法2）へボールが渡る。江森選手はそこからドリブルで一気に中央を突破し、GKと1対1となった。千載一遇のチャンスである。すかさずシュートを放つも、枠を捉えることはできなかった。

前半の10分が過ぎた頃、本学は玉川大に攻められ始める。しかし、宮原幸作選手（法4）率いるDF陣の堅実な守備と、GKの竹下主将の好セーブにより失点を防ぐ。前半の半ばには、今度は本学が試合の主導権を握る。右サイドからのセンタリングに、片石哲也選手（営4）がヘディングで合わせる。だが、これは惜しくもGKに弾かれてしまう。その後も細かいパスを繋いでいき、ゴール前へボールを運んでいくが、あと一歩のところで得点に結びつかない。両者ともに決定打を挙げられないまま、ハーフタイムに突入した。

後半が始まり、両校は一進一退の攻防を展開する。白熱した試合状況が続く中、後半15分に一瞬の隙から相手に先制点を決められてしまった。失点後、チーム全体の士気を上げるため、竹下主将を中心に部員同士が声を掛け合う。前半以上に指示を交わし果敢にゴールを攻めるも、玉川大の執拗なディフェンスに、好機を作り出せない。時間だけが無情に過ぎていく中、後半30分にペナルティエリア付近でフリーキックのチャンスを獲得した。キッカーが絶妙なボールを出すが、DFに阻まれる。終了時間が近づくと、GKの竹下主将自ら攻撃に参加する。「自分が前に出ることで、チームに最後まで攻めの姿勢を貫くことを示しました」と彼は後半のプレーをこう振り返る。しかし、健闘虚しく0―1のまま、終了を告げるホイッスルが鳴り響いた。

試合後、選手達の心情を表すように辺りは暗くなり、冷たい雨が降り始めた。「最大の敗因は実力不足です。自分達の代わりに1部に上がれるよう、後輩には頑張ってもらいたいです」と思いを語ってくれた。4年生が経験したこの悔しさが、次の世代にとって良い刺激となることを切に願う。

（榎本元気）

熱闘の末敗れる

ボウリング部


冷静に狙いを定め、ボールを投じる三木選手

10月10日、立川スターレーンにおいて秋季リーグの対早稲田大戦が行われた。試合前、白井健一主将（営2）は「残念ながら、春のリーグで2部に落ちてしまいました。また1部に戻れるように、ここで結果を残したいです」と意気込みを語った。

今大会は、1チーム5人の団体戦形式で行われ、得点の合計で競い合う。そして、2ゲームを先取すれば勝利となる。

試合が始まると、本学は鋭く回転するフックボールと正確なコントロールを武器に、次々にピンを倒していく。その中でも、ターキーを決めた峯岸鉄大選手（法2）は、196点を獲得して好成績を収めた。一方で、相手チームは2人の選手が200を超える点数を叩き出す。これによって合計点で差をつけられ、初戦を落としてしまった。

2ゲーム目に入り、調子を上げてきたのは野口大介選手（独2）である。ストライクとスペアを決め続け、今ゲームで最高の224点を挙げた。また、清田優輝選手（化1）も好調で、1投目から6連続でストライクを成功させた。後半でミスが重なってしまったものの、221点と高スコアを記録する。両選手の活躍により、同点に持ち込んだ。

いよいよ、試合は最終ゲームへと突入する。より声援が増す中、選手達はさらに集中力を上げてボールを投じていく。本学は斉藤敦選手（済4）と三木明選手（生1）が4連続ストライクを出し、200点越えを果たした。だが、相手選手も次々と高得点を獲得し、合わせて1000を上回るスコアをマークする。本学は合計点が一歩届かず、1―2で敗北を喫してしまった。

白井主将はこの試合を振り返って「スペアを取るべき場面でミスをするなど、反省点が多かったと思います。まだまだ練習が必要ですね」と総括した。今後も鍛練を積み重ね、再び1部に返り咲けるよう、精進してほしい。

（内田哲郎）

ロッカールーム

馬術部　小出 瑞樹さん（済3）

高みへの道のり

人馬一体の妙技を颯爽と表現し、ゴールへ辿り着く速さを競い合う、それが馬術である。今回お話を伺った小出瑞樹さんは、馬術部次期主将にして競技の名手だ。

彼が馬術に興味を持ったのは、本学初等科に在籍していた頃である。オール学習院の集いにおいて、乗馬を体験する。これがきっかけで小出さんは高校生ながら、本学の馬術部に入部し、大学生に交じって活動を始めたそうだ。そして彼は、大学へ入学してからも馬術への熱意を高め続け、精力的に取り組んできた。

そんな小出さんは、大学1年の5月に、周囲の期待を背負って東都学生馬術大会に出場し、大学馬術界にデビューする。しかし、障害飛越競技に出場したものの、馬が跳躍を拒んだために残念ながら失権となってしまった。彼は「洗礼を受けた気分でした」と当時のことを苦い表情で振り返る。そして「今までの訓練を見直し、改めて馬と向き合うことを心掛けました」と懐かしみつつ語った。

それから着々と実力を伸ばしていった彼は、今年の1月に転機を迎える。既に雪桜という馬が小出さんの相棒であったが、新たに貴桜が仲間に加わったのだ。年長の雪桜は、出会った時にすぐ小出さんに慣れたが、若い貴桜は神経質な性格なため、最初はお互いに馴染めなかったという。彼は「貴桜は良い素質を持っているのですが、言うことを聞かせられなかったので複雑な気持ちでした」と、当時の悩みを打ち明けてくれた。それでも、丹念に世話を続けたことで、貴桜は徐々に彼に心を開いていく。

息の合うパートナー達を得た小出さんに、好機が到来する。今年の6月に行われた関東学生馬術大会の馬場馬術に雪桜と出場し、全国出場レベルの得点率である55%に達したのだった。その結果、毎年10月下旬に開催される全日本学生馬術大会の出場権を勝ち取った。

全日本大会に向けて「馬にはプレッシャーを掛けずに走らせたいです。それと同時に、ベストを尽くして上位に入賞したいです」と意気込みを語る。その言葉から、小出さんの馬術に対する熱い思いが垣間見える。これからも彼らは、力を合わせて困難を乗り越えていくだろう。

（菅家優）

再来を誓う

少林寺拳法部

11月7日、日本武道館にて少林寺拳法全日本学生大会が行われた。今回は全国から159校、総勢3000人余りの拳士が集結している。試合前に主務の奥山大輔拳士（営3）は「大会に向け、より実戦に近い形で修練をしてきました。決勝への切符を得られるように頑張ります」と話す。

1人で演武する男子単独有段には、奥山拳士が出場した。彼の気迫のこもった突きや蹴りは、まるで相手と対戦しているかのように感じられた。後半に織り成された華麗な跳躍からの飛び二連蹴りに、素早い蹴上と手刀。一閃の間に放たれた天地拳第四系は、見る者を魅了した。

続く男子二段には、池澤篤史拳士（法2）と岡部壮一郎拳士（済2）が臨場。合掌礼をして演武が始まると、2人は切れのある技を掛け合う。彼らの綺麗な投げ技からは、過酷な修練を積み重ねたことがうかがえた。だが、緊迫した空気の中で所作が固くなってしまう。岡部拳士は「試合では、練習以上のことはできないと痛感しました」と唇を噛みしめながら振り返る。


力強い蹴りを放つ池澤拳士（右）

本学は、今大会で女子団体に初出場した。6人の拳士は、一糸乱れぬ動きで忠実に型を披露していく。その優美な身のこなしに、観衆は目を奪われた。他大に引けを取らない、堂々の演技である。

こうして本学は9種目に出場するが、いずれも本戦に駒を進めることができなかった。大会終了後、奥山拳士は「緊張により、実力を充分に出せなかったことが敗因だと思います。後輩には関東大会に向けて、今後も稽古に励んでほしいですね」と語った。彼らは未来に課題を残したが、次こそは弛まぬ努力で本学の名を全国に馳せることを期待する。

（川島旺洋）

TOPICS

その他の試合結果

【硬式庭球部】▼関東大学テニスリーグ5部▽男子3位

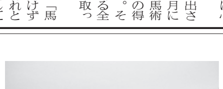
【射撃部】▼甲南戦▽優勝▼秋季首都十大学定期戦▽団体2位▽個人2位　山下瑛樹

デスクの片隅

大学新聞社の活動は、新聞の発行が近づくにつれ、その忙しさを増していく。締切直前ともなると、作業に没頭している部員が多く見受けられる▼私自身、期限当日に大急ぎで仕事を終わらせることが多い。その度、後悔の念に駆られてしまう。早くから記事を書き始めていれば、土壇場で大慌てすることもないはずだったのだ▼加えて、私1人の仕事が遅れてしまえば、周りにも迷惑を掛けてしまうことになる。なぜなら、新聞は皆で協力して作りあげるものだからだ。実際に、私は記事の修正のために夜遅くまで残らざるを得なかったことがある。この時、他の部員達も付き合わせることになってしまった▼そもそもこの問題は、新聞の執筆を先延ばしにしてしまう、自分の怠惰が原因である。今回の編集作業も、締切当日まで終わらず、またしても皆の足を引っ張る結果となってしまった…。この記事を機に、早めに仕事に取り掛かり、余裕を持って編集作業を終えられるように心掛けていきたい。（房）

学内ボート大会参加者募集

学習院大学に所属する、学生、教職員がボートスポーツを体験できる「学内ボート大会」が十一月二十八日に開催される。



埼玉県戸田市戸田公園で開かれるこの大会は、学習院大学に所属する学生、教職員ならだれでも申し込み可能（一人〜五人迄）。

大会では漕ぎ手四人と、舵手（コックス）の五人（最大六人）一組で漕いで行く。力の強さだけではなく、息を合わせることが重要なボート競技では体育会系でなくても優勝可能。参加賞、入賞記念品なども配られる。

詳細は掲示されるポスターまたはビラ、申込書から。

問い合わせは学習院大学漕艇部照井まで

izu-no-odoriko@docomo.ne.jp